

山本麻子著「ことばを鍛えるイギリスの学校—国語教育で何ができるか—」

岩波書店 2012 年 12 月 14 日刊を読む

小さいうちからどんどん読ませる—「批判的」に「詳しく」読む—

＜情報の読み方と応用の仕方＞

1. 英国に住んでいて、日ごろつくづく思うことは、新聞でも雑誌でも、そのほか紙に書かれた情報があふれんばかりだということだ。近頃はインターネットでの情報も多い。これでもか、これでもか、という感じで文字でアピールしてくる。したがって受け取る側は常に必要な情報とそうでないものを分け、批判的な態度でそうした情報に対処する方法を知っていなくてはならない。
2. 情報の読み方、応用の仕方については、中等学校でも引き続き教えられる。ただ、受身的に読むばかりではなく、よい点については自分で実際に採り入れ、使ってみるように奨励しているのが特徴だ。中等学校段階でのナショナルカリキュラムには、この年代の者が培うべき能力として、次のようなことが挙げられている。
 - (1) 書かれたものから、情報、出来事、主要点、着想を取り出し、それを解釈することができる。
 - (2) 書かれたものの意味を推測し、著者の意図がわかる。
 - (3) いろいろな資料からの情報を選択したり、比較したりすることができる。
 - (4) 情報の有効性を評価し、関係する情報を無関係な情報から振り分け、事実と意見とを区別することができる。
 - (5) 読者や視聴者が、書かれたものに対してどのように反応するかがわかる。
 - (6) 書かれたものがいろいろに解釈されうることを、自分の解釈を擁護しつつ、議論することができる。
3. これらどの項目をとっても、そこで扱われている技術は、その後高等教育で必要になるだけでなく、仕事についてから、また、日常生活、社会生活で欠かせないものとなるのは明らかだ。

＜作品の詳細な鑑賞とはどういうことか＞

4. イギリスでは、初等教育のうちから、想像力をたくましくして「応答する」読者になるようにと、いわれる。そして中等教育に入った生徒たちは、さらに一步進む。すぐれているとされる作品を扱いつつ、次のような能力を目指すように指導される。
 - (1) 作品に応答するに当たって、重要な特徴、主題、登場人物が何であるか言うことができ、それに関する文章、句、情報を取り出すことができる。書かれたものが、歴史的、および、文学伝統に合致するものであることを理解する。
 - (2) 作品に応答するに当たって、生徒たちは、重要な着想、主題、出来事、登場人物について、推論したり演繹法を使ったりしながら、理解していることを示す。書かれてたものがその時代背景や文化を反映していることがわかる。自分の見解を説明する時は、テキストを引用しその箇所を言うことができる。
 - (3) さまざまな読み物を読むに当たって、意味には何重にも層があることがわかり、その重要性和効果について語ることができる。文芸作品に対して、使われている言語、構成、主題などについて、該当箇所を引用しつつ個人的な見解を述べる。

(4)詩、劇、小説に対して、個人的で、かつ、批評的な応答を、作品の主題、構成、言語の特徴に言及しつつ、明確に述べる。なぜある作品が特に価値があり、影響力が大きいのかを理解する。

5. こうした項目をちょっと見ると、11 歳から 15、16 歳までの生徒たちにこんな能力を求めるのは早すぎるなどと思うこともあるかもしれない。しかし、このような課題を教師に課し、生徒に期待をかけるというところがすごいと思う。子どもによってはかなり早くから文学的な素質を現す者もいるだろう。また、こうした高い目標を掲げて勉強しているうちに全体的なレベルも次第にあがっていくのだと思う。

＜実際にどんなものを読むか＞

6. イギリスの子どもたちが実際に英語の時間にどのような文学作品を扱うのか、例を挙げてみたい。上の息子たちがキーステージ 4 とされる中等教育でも半ばを過ぎた 14、15 歳のころのことである。クラスごとに異なったものを読んでいたが、息子たちのクラスでは、ウィリアム・ゴールディングの『蠅の王』とスーザン・ヒルの『ぼくはお城の王様だ』が扱われていた。また他の少しレベルの上のクラスでは、シャーロット・ブロンテの『ジェーン・エア』を読んでいた。作品は、抜粋ではなく最初から最後まで読むことが前提だが、これは常識のようだ。だから作品といっても 1 冊の「本」を読むことになる。

7. 三男のときには、ハーバー・リーの社会小説とアーサー・ミラーの戯曲『橋からのながめ』を細かく読んでいた。同じころ、19 世紀に書かれたトマス・ハーディ、エリザベス・ギaskell、エドガー・アラン・ポー、H. G. ウェルズ、コナン・ドイルなどの短編も読んでいた。このほか、19、20 世紀の詩については、ウィリアム・ブレイクから始まって、ワーズワース、キーツ、テニスン、テッド・ヒューズ、シェイマス・ヒーニーまで、16 人の詩人から多くの作品を収めた詩集も抜粋して授業で使われた。

8. 三男は 14 歳と 15 歳のときの 2 回の夏休みの間、学校から本のリストが渡され、最低 4 冊は休暇中に読むように言われた。リストには著名な作者 52 人から 73 の作品が挙げられている。日本の大学の英米文学科に学ぶ者なら誰でも知っていそうなタイトルであり、私には懐かしく思え、息子よりも私の方が興味をもったくらいだ。先に挙げた、ゴールディングやハーバー・リーの作品もこの中にあった。ジョージ・エリオット、バージニア・ウルフなどの女流作家のもの、ジョージ・オーウェル、ハックスレイなどの有名作品も入っている。近年映画化されたトールキンの『指輪物語』もあったし、詩集も含まれていた。その他、第一次世界大戦文学に関するものとして、6 人の作家とその作品が挙がり、さらに、それ以外の戦争文学から 5 人の作家とその作品が挙がっていた。後者にはヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』が入っていた。休み中に実際に息子が読んだのはせいぜい 3 冊ぐらいだったが、同級生には文学志向の者が多いから、たくさん読んだのだろうと想像した。こうした作品の内容は、私たちには翻訳してあったとしても難しそうなものもたくさんあるのに、15 歳のころの読み物として勧められるということに驚いた。

9. 前にも述べたが、イギリスのナショナルカリキュラムでは、中等教育の課程でシェイクスピアの戯曲を最低 2 つは扱わなくては行けない。上の息子たちの場合は 15 歳のころ、英語の授業の多くの時間をシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』の勉強に費やした。また、下の息子のときには、同時期に『から騒ぎ』を読んだ。こうした教材の選択は英語科の教師全体の合意によ

るものだったようだ。

10. 上の息子たちのときには、学期初めの 1 週間はずっと、英語の 40 分授業のほぼ半分以上を 1960 年代に作られた『ロミオとジュリエット』のカラー映画のビデオ鑑賞に当てた。物語がだいぶわかってから脚本の鑑賞に入ったが、それも、まず教師が概括した後、詳細に読んだという。そして学期半ばを過ぎたある日、夕方から学年全体でバスで 2 時間ほどかかって、バーミンガム近くのウルパーハンプトンという町に行き、そこで上演中の『ロミオとジュリエット』を観劇した。その後、映画と実際の舞台の両者について、場面設定、演技、強調点の解釈の仕方などを比較したという。息子たちは、その後、『ロミオとジュリエット』のテキストの内容について一幕ごとに試験を受けたとのことだった。

＜朗読の機会もある＞

11. 下の息子が 8 歳ぐらいのときに課された「話の試験」のことは前に述べたが(第 4 章 2 参照)、試験では同時に詩の朗読もあった。息子は、ロバート・ルイス・ステューブソン¹の詩を一篇選び、暗記して朗読した。しかし、あまり練習しなかったものだから、「感じがこめられてない」という評価をもらってしまった。
12. 後の章で述べるが、劇の機会が多いのに比べて詩や小説を人前で朗読する機会はそれほど多くはない。だが、朗読ということで思い出すのは、下の息子が 14 歳のころ「一日芸術祭」のようなものがあったことだ。絵画や音楽の演奏などがあったが、中心は生徒全員 120 人によるシェイクスピアの劇の発表であった。劇というより朗読といった方が当たっている。『ジュリアス・シーザー』『テンペスト』『ヴェニスの商人』『ハムレット』『ロミオとジュリエット』の 5 つの劇が同時に校内のあちこちに設けられた簡易ステージで演じられた。屋外でも屋根のあるところを選んで行われた。どれも 30 分ぐらいの一幕もので、生徒の服装はシャツとジーンズといった普段着で、みんなが参加できるように 1 つの配役に 2、3 人が割り当てられていた。その後、校庭の大きな木の下に「朗読コーナー」が設けられ、生徒たち有志の何人かが踏み台に立って、本の朗読を披露した。ジェーン・オースティンの『エマ』、コールリッジの『老水夫行』、現代作家の作品、児童文学からの抜粋が朗読された。シェイクスピアの劇のせりふを言うことといい、朗読といい、これらはみな、生徒による主体的な試みであったという。でも、英語のナショナルカリキュラムの内容に沿っていたから、英語の教師の意向も反映していたことになる。私はこれはよい動機づけになる試みだと思った。生徒たちはこのような際に、演出も率先して行っていた。

P116 ~ 123

[コメント]

山本麻子先生の本書には、教育に関心がある人、とりわけ児童、生徒、学生に教えることを職業としている人、保護者にとって極めて衝撃的な内容が山のように含まれている。また、本書は何をどのように学んだらよいか悩んでいる児童、生徒、学生にも極めて役に立つ「学習方法の教科書」と考える。

御紹介させて頂いた文章に含まれる著者や作品に親しむことで、日本人ならどのような著者、作品に親しむことが求められるかを考えることができる。とにかく、本書のすべてのページにこれからの日本の教育、これからの自分自身の学習や教える内容を考えるヒントが山のようにある。是非、御一読をお願いしたい。